

熊内遺跡
第8次調査
発掘調査報告書

2020年
神戸市教育委員会

熊内遺跡
第8次調査
発掘調査報告書

2020年
神戸市教育委員会

序

熊内遺跡の所在する神戸市中央区熊内町、熊内橋通、旗塚通一帯は、六甲山系から流れ出た生田川等の河川によって形成された南向きの扇状地上に位置し、日当たりや水はけがよく、古来から住みやすい環境であったことがしのばれます。

これまでの調査で、そうした場所に縄文時代早期から断続的に人が住み、弥生時代の後期には環濠集落を形成することが明らかとなっています。

今回の調査でも弥生時代後期の竪穴建物が発見され、環濠集落内における人々の営みが明らかとなりました。

現地での調査期間中には現地説明会を開催する機会を得られましたが、その際に近隣にお住いの方々をはじめ多くの方が来られ、地域の歴史に対する関心の高さを伺うことができました。本書がこの地域の歴史を明らかにするための一助となり、また文化財の保護に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書を刊行するにあたりご協力いただきました関係機関・関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は、神戸市中央区熊内橋通6丁目302-1、302-2、303～305、351、352において平成30年度に実施した熊内遺跡第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成30年8月7日から10月18日までの期間で実施し、令和元年度は神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、発掘調査報告書の作成を行った。
4. 現地での調査は、神戸市教育委員会文化財課学芸員　繩纏文佳、田島靖大が担当した。
5. 調査で出土した遺物および写真・図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
6. 本書の編集は、繩纏、田島が行った。
7. 現地での遺構写真撮影は調査担当者が行った。遺物写真撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて内田真紀子氏（写房楠華堂）が行った。
8. 「第2章　調査成果　第3節　第1遺構面　SB02」のハチに関する記述は、帯広畜産大学　山内健生氏の鑑定結果をもとに、田島が執筆した。
9. 石製品の岩石種については、神戸市教育委員会文化財課学芸員　中村大介、山田侑生の助言を得た。
10. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。
11. 本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「新神戸」を使用した。
12. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、事業主である和田興産株式会社に多大なる協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

目 次

序

例言

目次

第1章 はじめに

| | |
|----------------|---|
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 1 |
| 第3節 既往の調査 | 4 |
| 第4節 調査に至る経緯と経過 | 6 |

第2章 調査成果

| | |
|------------|----|
| 第1節 調査区の設定 | 8 |
| 第2節 基本層序 | 8 |
| 第3節 第1遺構面 | 10 |
| 第4節 第2遺構面 | 25 |
| 第3章 まとめ | 28 |

挿図目次

| | | | |
|------------------|----|---------------------|----|
| 図1. 熊内遺跡の位置 | 1 | 図15. SD17平面図・断面図 | 20 |
| 図2. 周辺の遺跡 | 2 | 図16. SK17平面図・断面図 | 20 |
| 図3. 既往の調査 | 4 | 図17. 溝・土坑出土土器 | 21 |
| 図4. 調査区割り図 | 8 | 図18. SX01平面図・断面図 | 21 |
| 図5. 調査区土層断面図 | 9 | 図19. SX02平面図・断面図 | 21 |
| 図6. 第1遺構面平面図 | 10 | 図20. SX05平面図・断面図 | 22 |
| 図7. SB01平面図・断面図 | 11 | 図21. SX07平面図・断面図 | 22 |
| 図8. SB02平面図・断面図 | 12 | 図22. 落ち込み出土土器 | 23 |
| 図9. SB02出土土器 | 14 | 図23. ピット出土土器 | 23 |
| 図10. 第8次調査出土石製品 | 16 | 図24. 遺物包含層他出土土器 | 24 |
| 図11. SD01平面図・断面図 | 17 | 図25. 第2遺構面平面図 | 25 |
| 図12. SD04平面図・断面図 | 18 | 図26. SD18・19平面図・断面図 | 26 |
| 図13. SD08平面図・断面図 | 18 | 図27. 既往の調査成果 | 30 |
| 図14. SD11平面図・断面図 | 19 | | |

挿図写真目次

| | |
|-------------------|---|
| 挿図写真1・2. 現地説明会の様子 | 6 |
|-------------------|---|

表目次

| | |
|------------|----|
| 表1. 既往の調査 | 5 |
| 表2. 石製品観察表 | 26 |
| 表3. 土器観察表 | 27 |

写真図版目次

写真図版 1

1. 調査区空中写真(俯瞰モザイク)

写真図版 2

1. 1区(調査時1区)全景
2. 1区(調査時5区)全景

写真図版 3

1. 2区全景
2. 3区(調査時3・4区)全景

写真図版 4

1. 4区(調査時6区)全景
2. SB01全景

写真図版 5

1. SB02全景
2. SD18・19全景

写真図版 6

1. SB02中央土坑
2. SB02-P1
3. SB02内粘土塊出土状況

写真図版 7

1. 熊内遺跡第8次調査出土土器

写真図版 8

1. SB02出土土器(1)
2. 熊内遺跡第8次調査出土石製品

写真図版 9

1. SB02出土土器(2)
2. 遺構出土土器(除くSB02)

第1章 はじめに

第1節 地理的環境

熊内遺跡は、神戸市域を南北に分断する六甲山地の南麓に位置し、JR三ノ宮駅から北東に約1.2km、山陽新幹線新神戸駅から南東に約0.4kmの神戸市中央区熊内町・熊内橋通・旗塚通一帯に広がっている。ここは六甲山地から流れ出た生田川と、それに合流する芋川が形成した扇状地上である。この生田川は熊内遺跡の西端を流れて海へ注いでいるが、これは明治4年に河川の付け替えが行われ、新生田川と呼ばれるようになった後の流路であり、それ以前は新神戸駅の南で南西方向へ折れ、JR三ノ宮駅を経て、現在のフラワーロードを流れている。そのため、遺跡が存在した当時の熊内遺跡は、河川からやや離れた場所に立地していたことになる。

第2節 歴史的環境

縄文時代早期前半には、雲井遺跡から、ネガタイプの押型文土器である大川式・神宮寺式を伴う集石遺構、土坑等が、二宮東遺跡では神宮寺式～神並上層式の土器を伴う土坑が見つかっている。宇治川南遺跡では、流路内から早期から晩期の土器が出土している。後期には雲井遺跡、生田遺跡、小野柄遺跡などで土坑が見つかっているほか、生田遺跡では土偶が出土している。

弥生時代には、宇治川南遺跡で前期後半の土器が宇治川旧河道中から出土している。布引丸山遺跡の土器は、小林行雄氏により中期後半の凹線文を多用する土器群として報告されて、畿内の弥生時代中期の土器編年に大きな影響を与えた。雲井遺跡では、弥生時代中期の竪穴建物

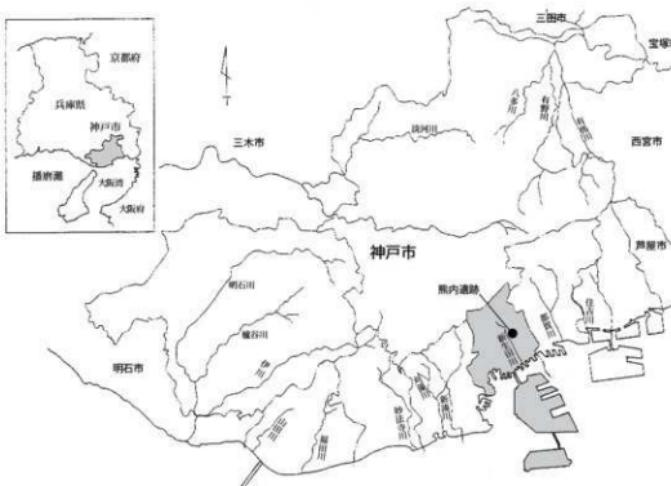
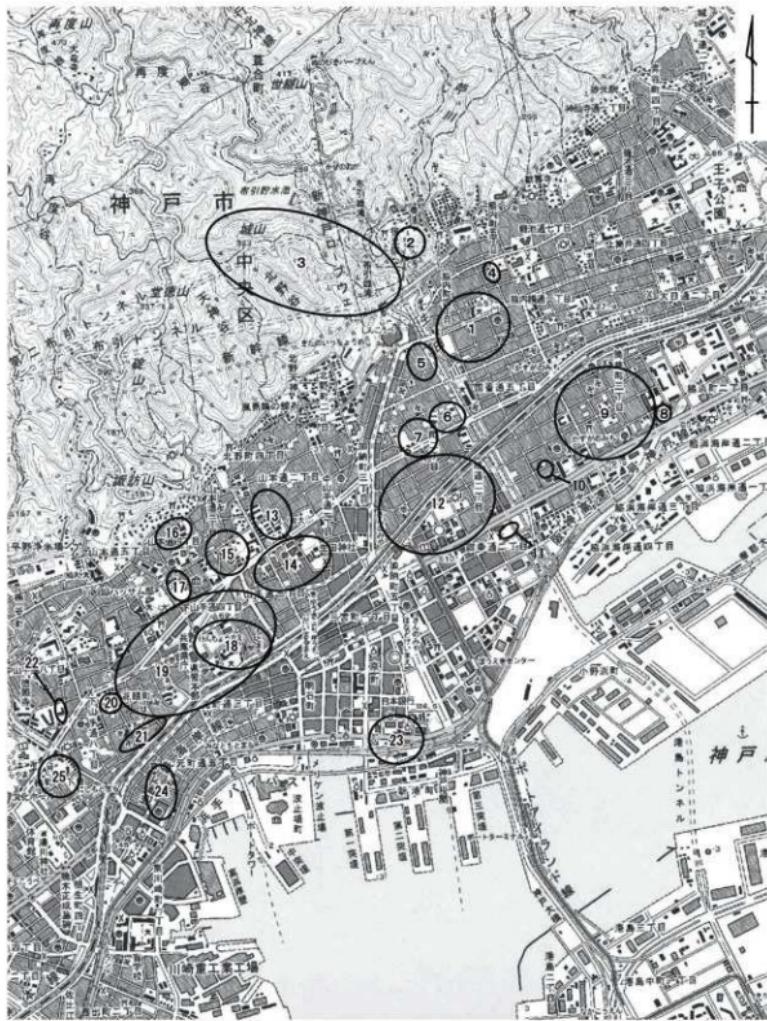


図1 熊内遺跡の位置



- | | | | | |
|-----------|------------|---------------|------------------|------------|
| 1. 熊内遺跡 | 2. 布引丸山遺跡 | 3. 滝山城跡 | 4. 中央区 No. 46 遺跡 | 5. 生田町古墳群 |
| 6. 二宮東遺跡 | 7. 二宮遺跡 | 8. 藤浜遺跡 | 9. 日暮遺跡 | 10. 吾妻遺跡 |
| 11. 小野柄遺跡 | 12. 雪井遺跡 | 13. 花隈城向城 | 14. 生田遺跡 | 15. 中山手遺跡 |
| 16. 城ヶ口遺跡 | 17. 中山手西遺跡 | 18. 旧三の宮駅構内遺跡 | 19. 花隈城跡 | 20. 下山手遺跡 |
| 21. 北長狭遺跡 | 22. 下山手北遺跡 | 23. 海軍操練所 | 24. 元町遺跡 | 25. 宇治川南遺跡 |

図2 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

や玉作りに関連する石製品が発見されている。また中期後葉には雲井遺跡と生田遺跡で方形周溝墓群が確認されているほか、後期末には、日暮遺跡や下山手遺跡で竪穴建物が、中山手遺跡で溝、土坑、ピットが発見されている。

古墳時代には、日暮遺跡で前期から中期初めにかけて竪穴建物が発見されている。生田遺跡では、中期～後期の竪穴建物、掘立柱建物が多数検出されている。また、後期には雲井遺跡や下山手遺跡でも竪穴建物が発見されている。

旧生田川流域とその周辺には割塚古墳、生田町古墳、中宮古墳、中宮黄金塚古墳、三本松古墳など複数の後期古墳が築造されていたようだが、明治～昭和初期の市街地化によってそのほとんどが消滅したため詳細は明らかではない。現在では横穴式石室が確認された中宮黄金塚古墳のみが残る。

飛鳥時代には、二宮遺跡で鍛冶関連遺構や竪穴建物、掘立柱建物が発見されている。また、下山手遺跡でも同時期の掘立柱建物が検出されている。

奈良時代には、日暮遺跡付近を古代山陽道が通過していると推定され、日暮遺跡ではそれと同時期の掘立柱建物が見つかっている。二宮遺跡では、流路内から土器・土馬が、花隈城跡では流路内から大量の木製品がそれぞれ出土した。

平安時代中頃には、日暮遺跡で掘立柱建物群と地鎮遺構が検出され、在地の有力者の存在が推定される。また土錐が出土することから、漁業従事者の居住とも考えられている。

鎌倉時代には、日暮遺跡や雲井遺跡で掘立柱建物が発見されている。

また南北朝時代には滝山城が布引の滝の北西側山上に築かれた。戦国時代末期には、荒木村重によって現在の兵庫県庁付近に花隈城が築かれる。両城郭とも、荒木村重が織田信長に反旗を翻した際に織田勢によって攻め落とされ、廢城となった。

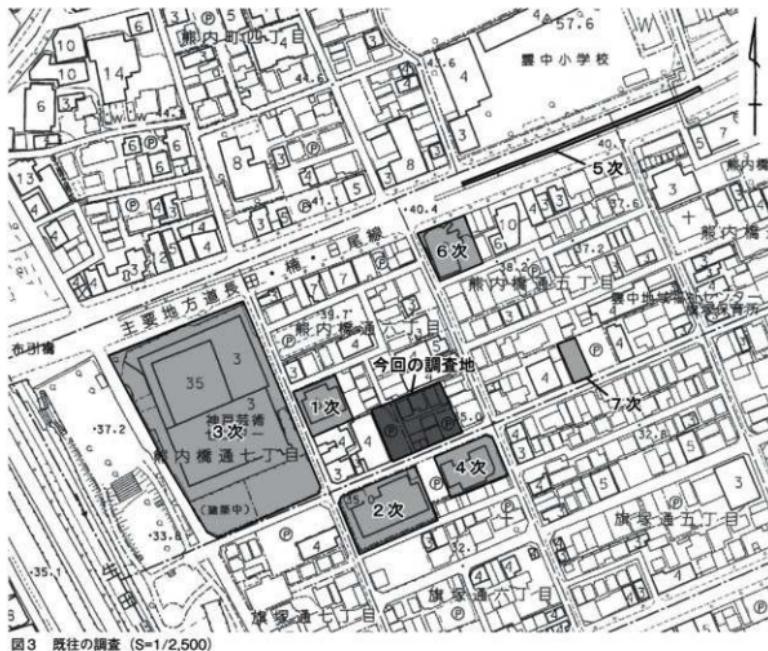
参考文献

- 丸山 謙「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1990
中谷 正「生田遺跡第4次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2006
藤井太郎「生田遺跡 第8次 発掘調査報告書」神戸市教育委員会2016
木村次雄・小林行雄「釧子発見の神戸市生田町古墳」『考古学雑誌第20巻第6号』考古学会1930
谷 正俊「生田町古墳群第1次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003
丹治康明「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1986
内藤俊哉他「小野柄遺跡 第1次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003
丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会1991
安田 淳「雲井遺跡第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
浅谷誠吾「雲井遺跡第19次調査」『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2007
山口英正「雲井遺跡第20次調査 発掘調査報告書」神戸市教育委員会2006
西岡誠司他「雲井遺跡第28次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2010
川上厚志「雲井遺跡第33次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2010
川上厚志「雲井遺跡第37次調査」『平成27年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2018
阿部敬生「下山手遺跡第6次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会2014
田部美智雄「滝山城」『日本城郭史体系 第12巻 大阪・兵庫』新人物往来社1981
菅本宏明「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
木戸雅寿他「中山手遺跡第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
山口英正「二宮東遺跡 第2次調査」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2008

浅谷誠吾「二宮東遺跡 第3次調査 発掘調査報告書」2010
小林行雄「神戸市布引丸山の弥生式土器」『考古学第6巻第4号』東京考古学会1935
田部美智雄「花熊城」『日本城郭史体系 第12巻 大阪・兵庫』新人物往来社1981
西岡巧次「花隈城跡第5次調査」『平成24年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2015
谷 正俊「日暮遺跡第11次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
兼藤保明他「日暮遺跡第11次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
西岡巧次「日暮遺跡第20次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2004
谷 正俊「日暮遺跡第20次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2004
東喜代秀「日暮遺跡第24次調査」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2008
東喜代秀「日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2010
黑田恭正「日暮遺跡第38次調査」『平成25年神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2016
谷 正俊「日暮遺跡第39次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会2016
谷 正俊「日暮遺跡第43次調査」『平成27年神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2018
新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古」神戸市役所1989

第3節 既往の調査

熊内遺跡は、平成元年8月に共同住宅建設に伴う試掘調査で、初めて確認された遺跡である。当遺跡内ではこれまでに、7回の調査が実施されている。



第1次調査では、ベッド状遺構を持つ方形堅穴建物2棟と、堅穴建物の中央土坑と考えられる土坑が見つかっている。弥生時代後期から庄内式併行期の土器が出土しており、当遺跡が弥生時代後期の集落であることが明らかとなった。

第2次調査では、直径10mの大型な円形堅穴建物1棟、方形堅穴建物3棟が見つかった。また調査区の南西隅では、幅4m、深さ1.5m、断面逆台形の大溝を検出した。弥生時代後期の土器のほか、特殊な形態の銅鑑が出土した。弥生時代後期において一つの集落の中で、堅穴建物が円形から方形に変化することが確認され、大溝は環濠になる可能性が示唆された。

第3次調査では、神戸市最古となる縄文時代早期前半の堅穴建物が発見された。また縄文時代中期末～後期中葉の土器を伴う土坑が多数見つかっている。さらに晩期の土器がまとまって出土したが、遺構は見つかっていない。弥生時代は後期の堅穴建物9棟、集落を囲む二重の環濠が確認され、多量の土器が出土した。ここから当遺跡の環濠集落は後期前半中頃から後期後半の早い段階までの比較的短期間の集落であることが明らかになった。また古墳時代前期の堅穴建物3棟、古墳時代後期の土壙墓、木棺墓も当遺跡では初めて検出された。

第4次調査では、調査地内の遺構面のほとんどが従前の建物により大きく擾乱を受けていた。詳細な時期は不明だが、中世以前の溝、ピットなどを検出した。また弥生時代後期の土坑や壇墓を確認した。

第5次調査では、堅穴建物1棟、土坑などを確認した。遺構に伴う遺物がないため、詳細な時期は不明だが、弥生時代後期と考えられる。この調査により、遺跡の東側にも居住域が広がっていることが確認できた。出土遺物は、弥生土器のほかに、奈良～平安時代の須恵器、土師器が出土しているため、周辺にこの時期の集落が存在する可能性も示唆された。

第6次調査では、溝2条、土坑多数、ピットを検出した。2条の溝は並行しており、奈良時代の須恵器、土師器が出土し、道路状遺構である可能性が考えられる。調査地は環濠内に想定されるが、弥生時代後期の遺物はピットからわずかに出土したのみである。

第7次調査では、弥生時代後期の遺物包含層と落ち込みを検出した。工事影響深度までの調査であるが、下層にも遺物が含まれることから、さらに下層に遺構面が存在する可能性がある。

表1 既往の調査

| 次数 | 調査年度 | 所在地 | 調査主体 | 調査面積 | 調査内容 | 参考文献 |
|----|-----------|----------|------------------------|----------------------|---|--------------------|
| 1 | 平成元年度 | 熊内橋通6丁目 | 神戸市教育委員会 | 172m ² | 弥生時代後期堅穴建物、土坑、溝 | 神戸市1992 |
| 2 | 平成2年度 | 旗塚通6丁目 | 六甲山麓遺跡調査会 | 870m ² | 弥生時代後期堅穴建物、環濠 | 六甲山麓遺跡調査会1996 |
| 3 | 平成12～13年度 | 熊内橋通7丁目 | 神戸市教育委員会 (財)神戸市体育協会 | 12,400m ² | 縄文時代早期の堅穴建物、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の堅穴建物、掘立柱建物、二重環濠、古墳時代前期の堅穴建物、古墳時代後期の木棺墓、土壙墓、近現代の旧市電車庫、トラバーサ基礎 | 神戸市2003 神戸市2004 |
| 4 | 平成15年度 | 熊内橋通6丁目 | 神戸市教育委員会 | 130m ² | 弥生時代後期の壇棺墓、土坑、ピット、中世以前の遺構面 | 神戸市2006 |
| 5 | 平成15年度 | 熊内町3・4丁目 | 神戸市教育委員会 | 230m ² | 弥生時代後期の堅穴建物、土坑、落ち込み | 神戸市2006 |
| 6 | 平成16年度 | 熊内橋通5丁目 | 神戸市教育委員会 | 150m ² | 弥生時代後期のピット 奈良時代の並行する溝 | 神戸市2007 |
| 7 | 平成29年度 | 熊内橋通5丁目 | 神戸市教育委員会 | 28m ² | 弥生時代後期の落ち込み | 神戸市2020 |
| 8 | 平成30年度 | 熊内橋通6丁目 | 神戸市教育委員会 | 637m ² | 弥生時代後期の堅穴建物、溝、土坑 | 本書 |

参考文献

- 丸山 謙他「熊内遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1992
浅岡俊夫他「神戸市中央区 熊内遺跡－第2次調査－」六甲山麓遺跡調査会1996
安田 淳「熊内遺跡第3次調査 発掘調査報告書」神戸市教育委員会2003
安田 淳「熊内遺跡第3次調査」「平成13年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2004
浅谷誠吾他「熊内遺跡第4次調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2006
井尻 格「熊内遺跡第5次調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2006
中居さやか「熊内遺跡第6次調査」「平成16年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2007
山田佑生「熊内遺跡第7次調査」「平成29年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2020

第4節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、共同住宅建設に伴って実施したものである。平成30年6月12日に試掘調査を実施した結果、弥生土器を含む遺物包含層が確認され、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について平成30年8月7日より本調査を実施した。

(2) 調査経過

今回の調査対象となった範囲は約637m²である。

今回の調査地はこれまで、宅地や駐車場として利用されていた。宅地内の路地に埋設されていたガス管撤去工事の調整や、残土の仮置き場を確保する目的から、調査対象範囲を南東部(1区)、北～中央部(2～4区)、ガス管理設部(5区)、西部(6区)の6区画に分けて調査を実施した。

平成30年8月7日から1～4区の掘削を開始した。9月11日には1～4区の調査を終え、埋め戻しをおこなった。

9月12日には5区の掘削を開始し、18日には6区の掘削を開始した。

10月6日には現地説明会を開催し、180名を超す参加者が来場した。

15日に3・4区の調査区南壁と6区の調査区西壁で下層確認のための断割りを実施した。その結果、6区で第2遺構面を確認し、遺構を検出した。

17日に6区及び第2遺構面の調査が終了し、19日にすべての現地調査を終えた。



挿図写真1 現地説明会の様子1



挿図写真2 現地説明会の様子2

(3) 調査組織

調査を実施した各年度の組織体制は以下の通りである。

平成30年度

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 長田 淳

総務部長 浜本 泰幸

教育施策推進担当部長 荒牧 重孝

文化財課長 千種 浩

埋蔵文化財センター担当課長 安田 澤

埋蔵文化財係長 前田 佳久

埋蔵文化財係担当係長 斎木 嶽、東 喜代秀、松林 宏典、中村 大介

事務担当学芸員 池田 穀

遺物整理担当学芸員 阿部 功

保存科学担当学芸員 山田 侑生

調査担当学芸員 纒纒 文佳、田島 靖大

令和元年度

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 長田 淳

教育次長 後藤 徹也

文化財課長 安田 澤

埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久

埋蔵文化財係長 東 喜代秀

埋蔵文化財係担当係長 斎木 嶽、松林 宏典、中村 大介

事務担当学芸員 阿部 敬生

遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 侑生

報告書作成担当学芸員 纒纒 文佳、田島 靖大

第2章 調査成果

第1節 調査区の設定(図4)

第1章第4節(2)調査経過で述べたように、調査時には6区画に分けて調査を行ったが、煩雑になるのを避けるため、本書では調査時の1区と5区を合わせて1区、調査時の3区と4区を合わせて3区、調査時の6区を4区として記述する。



図4 調査区割り図

第2節 基本層序

現地表面の標高はおよそT.P.34.40～35.40mで、北側から南側に向けて緩やかに傾斜している。調査地東側の中央付近は、耕作地として利用されていた名残りで約0.5mの段差がある。現地表面から約0.1～0.45mまでは盛土を含む造成土および搅乱土で、その下層に旧耕土層がある。旧耕土層の詳細な年代は不明だが、古代以降の須恵器や陶磁器を含む。

標高およそT.P.34.10～35.20mで、弥生時代後期の土器を含む遺物包含層である黒褐色シルト～黒褐色砂質シルト～淡黒褐色シルトとなる。遺物包含層は2～3層に分かれると、各層の上面で造構は確認できなかった。また各層で出土する遺物に時期差は見られなかった。

およそT.P.33.80～34.95mで第1造構面基盤層の黒褐色シルトとなる。

調査区南西部では、およそT.P.33.75～34.35mで第2造構面基盤層の黄褐色砂質シルトとなる。なお第2造構面基盤層は調査区北西端では第1造構面基盤層と面を同じくし、そこからおよそT.P.34.35mまで急激に凹み、そのまま緩やかに南側へと傾斜している。

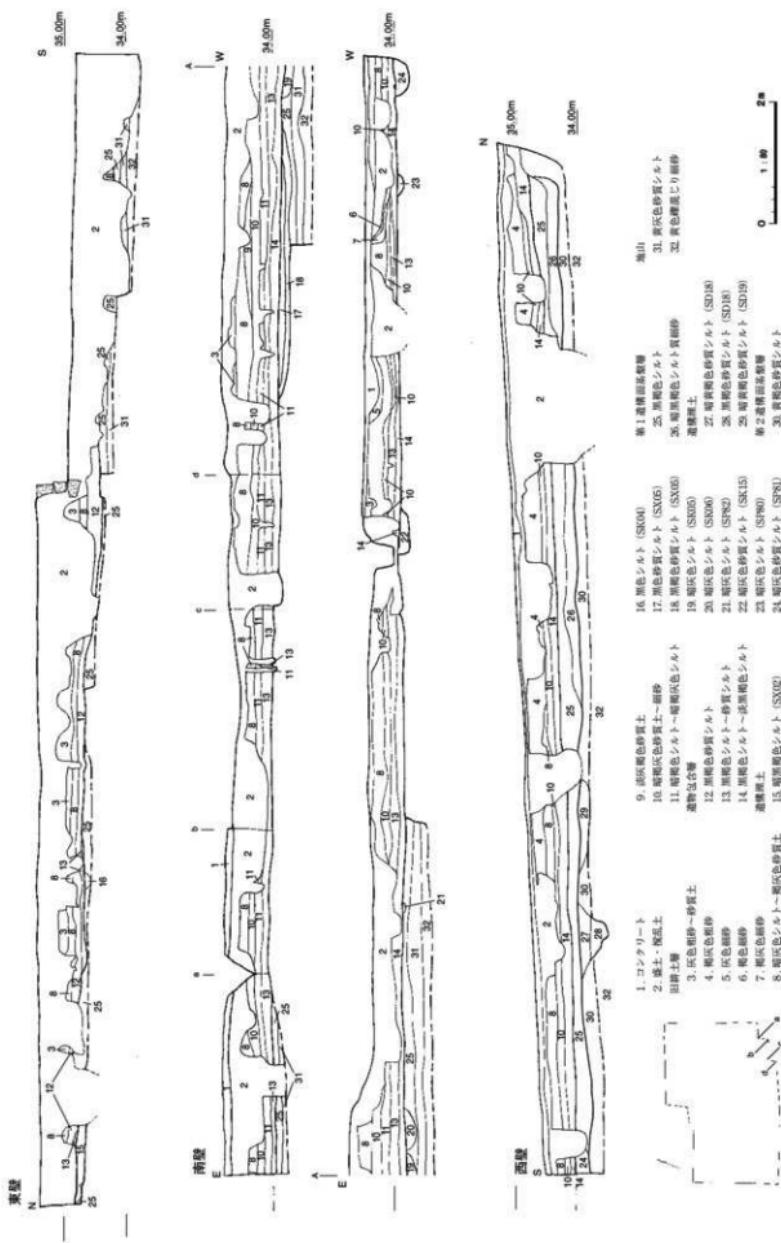


図 5 調査区土壤断面図

第3節 第1遺構面(図6)

遺構は堅穴建物2棟、溝14条、落ち込み5基、土坑17基、ピット約80基を検出した。出土遺物から弥生時代後期の遺構面と考えられる。

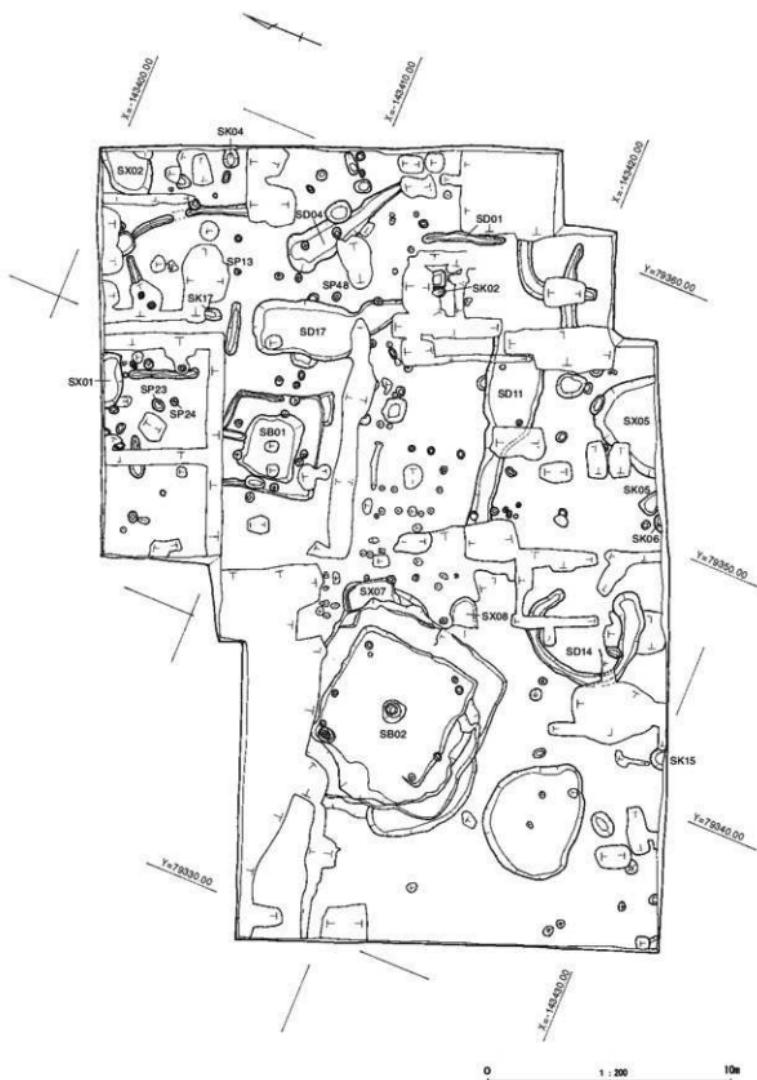


図6 第1遺構面平面図

1. 窓穴建物

本調査では大小2棟の窓穴建物を検出した。

SB01(図7)

1・2区で窓穴建物を検出した。平面形は東西4.2m×南北4.1mの隅丸方形である。検出面からの深さは約0.25mと削平が著しい。床面では、周壁溝、土坑1基、ピット5基(SB01-P1~P5)を検出した。

周壁溝は幅約20cm、深さ約10~30cmである。床面の北半を巡るが、南半では確認されなかった。

建物西壁では周壁溝の南西端が、土坑状に深く掘り込まれている。規模は東西約50cm、南北約80cm、深さ約20cmで、埋土から少量の弥生土器片が出土している。

床面では5基のピットを検出した。その規模は直径約30~35cm、深さ約10~20cmである。これらのピットの建物内における位置は不定であり、柱穴かどうかは不明である。

また床面中央部には不定形の凹みが掘りこまれているが、その性格は不明である。

遺物は、埋土から少量の弥生土器が出土しているが、建物の詳細な時期は不明である。

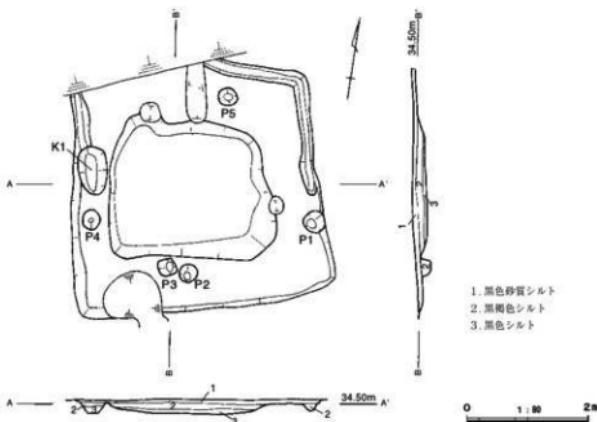
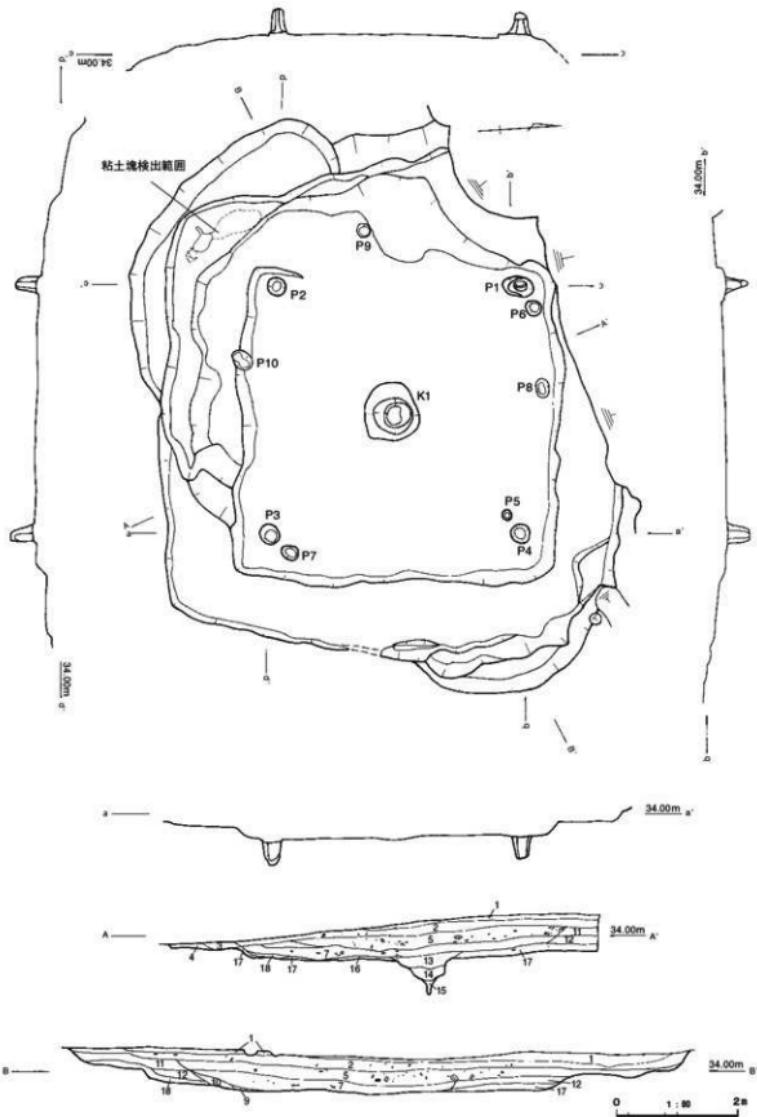


図7 SB01平面図・断面図

SB02(図8)

4区でも窓穴建物を検出した。平面形は東西約7.2m×南北約7.4mの隅丸方形で、検出面からの深さは約25~80cmである。床面の一部には厚さ約1~10cmの貼床を施す。建物内では、ベッド状造構、中央土坑(SB02-K1)、柱穴7基(SB02-P1~P7)を含むピット10基を検出した。

ベッド状造構は幅約80~110cm、高さ約10~20cmで地山を削り出し、その上に一部貼床を施す。西辺以外の三辺で検出したが、西側については埋没過程で壁面が崩れたか、あるいは造構が切りあっていたがそれを検出できなかったことにより、ベッド状造構を検出できなかった。しかし、本来は全周していたと考えられる。また南西隅ではほぼ完形の甕と、土器の原料と考えられる粘土塊が出土した。粘土塊は長さ約1.2m、幅約10~40cm、厚さ約10cmで、ベッド状造構上に置かれていた。甕は粘土塊の南に接し、口縁部を粘土塊に向けて立てかけるように置か



SB02 墓土

1. 暗褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 淡褐色粘性砂質土
4. 深褐色シルト
5. 黑色粘性砂質土
6. 淡黑色粘性砂質土
7. 暗灰色粘性砂質土
8. 淡灰色細砂
9. 黄色バイラント混じり細砂 (13の崩壊土)
10. 暗褐色シルト (12の崩壊土)
11. 淡褐色砂質シルト～淡褐色シルト
12. 淡灰黄色バイラント混じり砂質シルト～暗灰色粘性砂質土

中央土坑 (SB02-K) 墓土

13. 暗灰黑色粘性砂質土
14. 黑灰色砂質シルト
15. 淡褐色砂質シルト
- 粘土
16. 淡褐色粗砂
17. 淡灰色シルト～暗褐色シルト
18. 淡褐色粘性砂質土～暗褐色粗砂混じりシルト

図 8 SB02平面図・断面図

れていた。

中央土坑は直径約85cm、深さ約50cmの断面漏斗状を呈する。遺物は埋土中から弥生土器や被熱していると思われる砥石の小片、モモの種子が出土している。

床面では柱穴7基(SB02-P1～P7)を含む10基のピットを検出した。その内、SB02-P1～P4の4基が主柱穴と考えられる。SB02-P1は楕円形を呈し、長径約55cm、短径約30cm、深さ約45cmを測る。SB02-P1の柱痕埋土上層では、壺の上半部が出土した。下半部の破片はなく、人为的に打ち欠いた可能性があり、これは柱抜き取り後の祭祀に伴う遺物と考えられる。SB02-P2～P4は平面円形を呈し、直径約30～40cm、深さ約15～45cmを測る。

主柱穴の内、SB02-P2を除く3基はそれぞれSB02-P5～P7を伴う。これらの柱穴は直径約15～25cm、深さ約5～20cmと主柱穴に比べ規模が小さいため、主柱を補強する柱を立てた痕跡と考えられる。

その他のピットは直径約20～40cm、深さ約5～20cmを測る。

また、SB02の埋土の内、暗灰色粘性砂質土より昆虫遺体を多量に検出したため、周辺の土壤ごと取り上げ水洗作業を行った。この土壤中からアシナガバチ類の一種と見られる頭部、胸部、腹部の外骨格と翅を確認した。頭部を数えた結果、最小個体数は73個体である。昆虫遺体は粘性の強い土壤で密閉され大気から遮断されていたため、バクテリアによる分解など劣化作用を受けずに残存したと思われる。これらの種は樹下などに営巣するため、SB02が埋没していく中で人为的に埋められたと考えられる。なおハチは、すでに死んでいたものを集めて埋めたのか、生きたままのハチを巣ごと埋めたかについては定かではない。また、ハチを埋めた理由についても未詳である。

SB02出土遺物

埋土からは弥生土器と石製品が多数出土した。

土器(図9)

1はSB02-P1から、7は粘土塊と共にベッド状遺構上から、3、13、18は中央土坑から、2、4～6、8～12、14～17、19～22は建物埋土からそれぞれ出土した。特に5、6、12、14～17は床面よりやや上層から出土した。

1、2は壺である。

1は広口壺で、口径は13.2cmを測る。体部は下半を欠損している。頸部は直線的に立ち上がり、外反して口縁部を形成する。口縁端部は丸く收める。頸部には直径約4～5mmの刺突痕3個が、約4mm間隔で1ヶ所に施されている。外面は磨滅が激しく調整は不明だが、肩部内面にはユビオサエが残り、体部内面には斜め方向のハケが確認できる。

2は二重口縁壺の口縁部である。小片のため口径は不明である。口縁部に粘土帯を貼り付けて、幅の広い面を形成している。二重口縁部のみ残存し、壺全体の形状は不明であるが、残存部からかなり大型と考えられる。外面に波状文を描き、その上に直径約2.5cmの円形浮文を貼り付けている。なお、この円形浮文の周辺以外は磨滅が激しく調整は不明である。

3～9は壺である。

3は口径13.4cmを測り、体部中位に最大径を持つ。頸部はゆるく外反し、端部をつまみ上げる。体部外面には右上がりのタタキを、内面には縱方向のハケを施す。他の出土土器が黄褐色～橙褐色系の色調を呈するのと異なり、灰白色の色調を呈する。

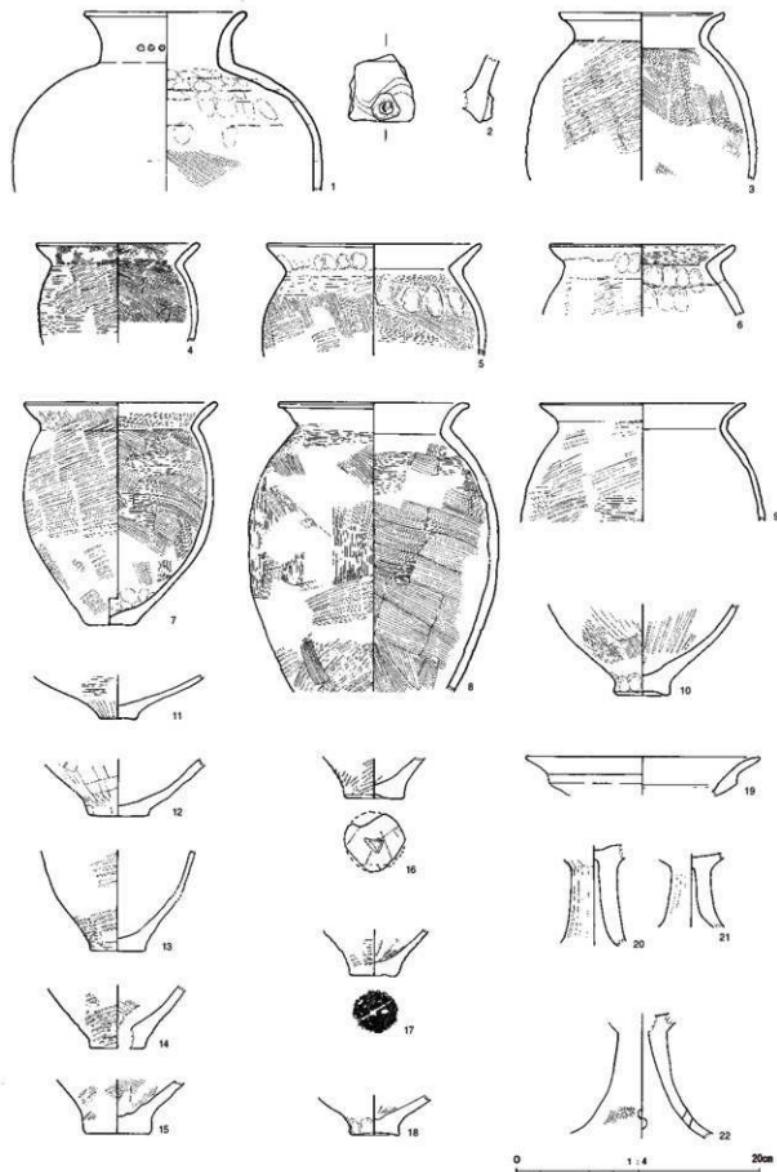


图9 SB02出土土器

4は口径12.7cmを測る小型品で、体部径は口径より小さい。口縁部は外傾し、端部を丸く收める。体部外面では全面に水平方向のタタキを、一部その上から右上がりのタタキを施す。口縁部外面はハケを施す。内面は横方向のハケを施す。

5は口径17.2cmを測る。口縁部は外傾し、端部を丸く收める。体部外面は、水平方向～右上上がりのタタキを施した後、部分的に縦方向のハケを施す。内面では横方向のハケの後、体部上位でユビオサエを施す。

6は口径15.0cmを測る。口縁部は外傾し、端部は丸く收める。頸部外面にはユビオサエが残り、また体部外面には右上がりのタタキを施す。内面は、体部ではユビオサエのみが見られ、口縁部では横方向のハケが施されている。

7は口径15.8cm、底径4.5cm、器高18.2cmを測り、体部上位に最大径を持つ。口縁部を半分以上欠損するが、それ以外はほぼ完形である。口縁端部は丸く收め、底部は輪台技法で形成する。体部から口縁部外面半ばにかけて右上がりのタタキを施した後、体部下位では縦方向のナデを、口縁部では縦方向のハケを施し、タタキを消している。内面では体部中位から口縁部にかけてハケを施す。また、底部内面にはユビオサエが残る。

8は口径15.0cmを測り、体部上位に最大径を持つ。口縁部は外反し、口縁端部はわずかに水平方向に広がった後、丸く收める。体部の中位にはスス・コゲと、被熱による赤焼けが見られる。体部外面の下位には右上がりのタタキを、中位～上位には水平方向のタタキを施した後、縦方向の板ナデを施し、タタキを一部消している。内面は、体部下位では縦方向のハケを、それより上位では横方向のハケを施す。

9は口径16.6cmを測り、体部中位に最大径を持つ。口縁部は外反し、端部は丸く收める。体部外面では水平方向のタタキを施す。内面の調整は磨滅のため不明である。

10、12は壺もしくは鉢底部である。10は底径4.0cmを測る。体部は湾曲して立ち上がる。外面はタタキを施した後、縦方向のハケ、更に縦方向のヘラミガキを施す。内面は縦方向のヘラミガキを施す。12は底径5.0cmを測る。底部は外面にユビオサエが残る。体部外面は縦方向のヘラミガキを、その上から板ナデを施す。内面はナデを施す。

11は壺底部である。底径3.0cmを図り、底部外面に縦方向のヘラミガキを施す。体部は外湾して大きく開き、外面は横方向のヘラミガキを施す。内面は磨滅が激しいため調整は不明である。

13は壺底部で、底径4.6cmを測る。外面は水平方向のタタキを施す。また被熱による赤焼けが見られる。内面は、底部で縦方向のナデを、体部下位でミガキを丁寧に施す。体部の立ち上がりから小型品と考えられる。

14～18は壺、壺、鉢いすれかの底部である。

14は底径4.6cmを測る。外面は水平方向のタタキ、内面は横方向のハケを施す。内面にはススが付着する。

15は底径5.6cmを測る。外面は右上がりのタタキを、内面はハケを施す。

16は底径4.9cmを測る。底部は輪台技法で成形され、製作時に土器の下に敷いていたと考えられる木葉痕が残る。外面は右上がりのタタキを施す。内面は蜘蛛の巣状に板ナデの痕跡が残る。

17は底径4.0cmを測る。外面は水平方向のタタキを施す。また被熱による赤焼けが見られる。底部には長さ約5mmののみ殻压痕が確認できる。内面は蜘蛛の巣状にハケの痕跡が残る。

18は底径3.8cmを測る。外面はタタキを施すが、磨滅が激しいため詳細は不明である。内面はナデの痕跡が残る。

19は高環の環部、20~22は脚部である。

19は口径19.2cmを測る。直線的な体部から外反して立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。内外面共に磨滅が激しく調整は不明である。

20、21の脚部は共に中空で外面は縱方向のヘラミガキを施す。内面は磨滅が激しく調整は不明である。21は脚部と環部を連続成形する円盤充填法で製作されている。

22の脚部は裾に向かって緩やかに外反して広がる。透孔は2ヵ所が残存していた。90°間隔で空けられているため、本来は4ヵ所に透孔があったと考えられる。磨滅が激しいため詳細は不明だが、内外面共にヘラミガキを施していたと考えられる。また脚部と環部の接合は円盤充填法によるものと考えられる。

石製品(図10-23~26)

埋土中や中央土坑から出土している。また中央土坑からは被熱痕跡のある砥石の小片も出土している。

23、24は中央土坑から、25、26は床面直上からそれぞれ出土した。

23は長さ11.6cm以上、幅12.6cm、厚さ6.4cmを測る砂岩製の砥石である。断面形状は台形を呈し、下半を欠損する。表面に使用痕が確認できる。また、左側面も使用した可能性がある。

24は長さ10.8cm以上、幅8.0cm、厚さ2.3cmを測る砂岩製の砥石である。断面形状は長辺がくぼむ長方形を呈し、下半を欠損する。表面に使用痕が確認できる。

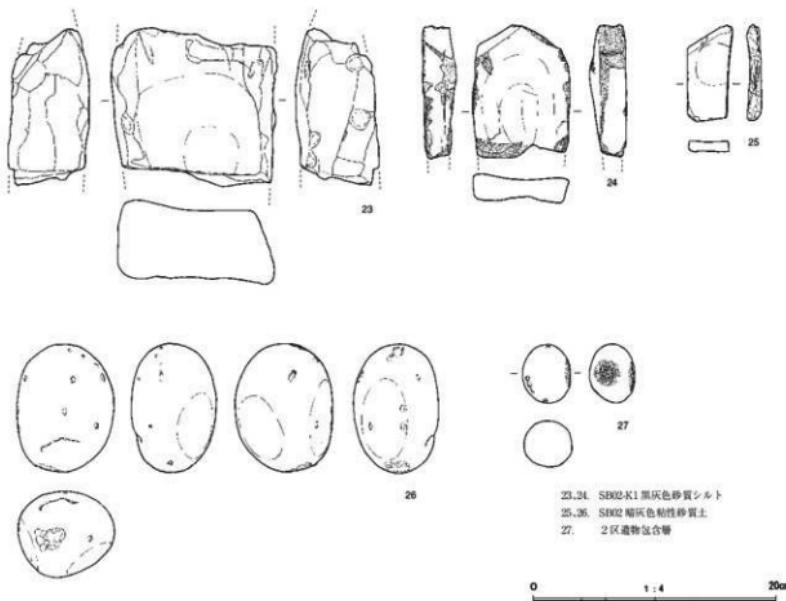


図10 第8次調査出土石製品

25は長さ7.6cm、幅3.6cm、厚さ1.1cmを測る砂岩もしくは泥岩製の砥石である。3面での使用痕が確認でき、特に表面は大きく凹んでおり、主にこの面が使用されている。

26は長さ10.6cm、幅7.0cm、厚さ7.0cmを測る花崗岩製の敲石である。下面に直径約2.5cmの敲面がある。その他表面と右側面に擦痕が確認でき、敲く用途の他、磨石としても用いられた可能性がある。

2. 溝

14条の溝を検出したが、その大半は調査区の東半に位置する。

SD01(図11)

1区に位置し、幅約25~40cm、深さ約5cmの浅い溝である。後世に削平を受けたため、本来はもっと深い溝であったと思われる。遺物は広口壺や甕もしくは鉢の小片などの弥生土器が出士した。

SD04(図12)

1・2区の東部に位置し、幅約50~170cm、深さは約10~25cmの溝である。北側から南側に向かって浅くなるため、南側は後世の削平を受けた可能性がある。遺物は甕などの弥生土器が出士した。

SD08(図13)

2区に位置し、幅約35~40cm、深さ約10cmの溝である。SD08のすぐ北側にはSX01があるが、双方の関係は不明である。遺物は鉢などの弥生土器が出士した。

SD11(図14)

1・3区南部に位置し、幅約0.8~2.3m、深さ約10~20cmの溝である。東西方向に延びる幅の広い溝であるが、東西端は搅乱により削平を受ける。西端は搅乱より西へ続かないことから、調査区の中央あたりで終わる可能性が高い。もしくは、西側のSX08に繋がる可能性もある。SD11より東側は、遺物を含む土層がわずかに堆積していたが、南側の立ち上がりが確認できなかつたため調査時は遺物包含層と考えていた。しかしその位置関係から、これがSD11の続きであった可能性が高い。その場合、調査区南東隅の搅乱まで続いており、更に調査区外まで伸びていたと考えられる。遺物は甕か鉢の底部などの弥生土器が出士した。

SD17(図15)

1区に位置し、幅約1.0~2.3m、深さ約10~20cmの溝である。SD04同様南側に向かって浅くなっているが、後世に削平を受けた可能性がある。加えて、南端は搅乱のため不明だが、南側で検出したSK02に続く可能性もある。遺物は広口壺や甕もしくは鉢の小片などの弥生土器が出士した。

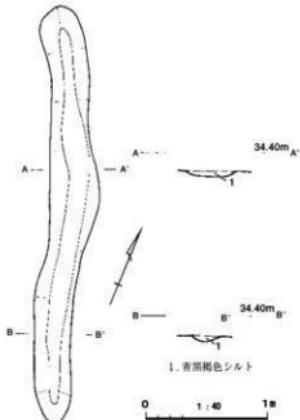


図11 SD01平面図・断面図

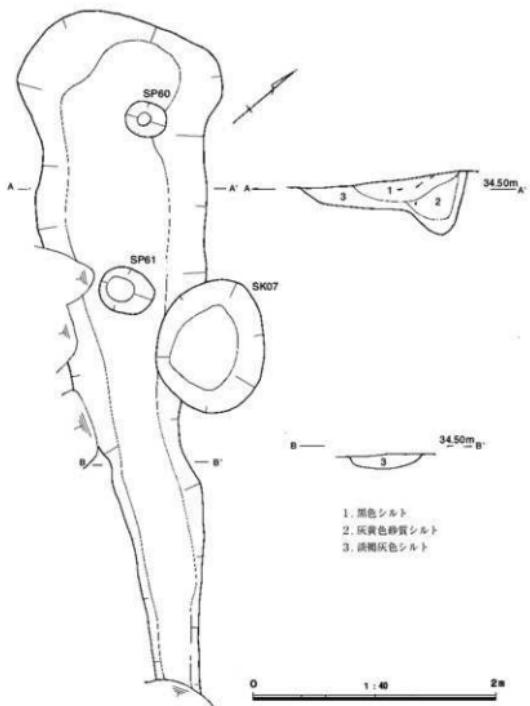


図12 SD04平面図・断面図

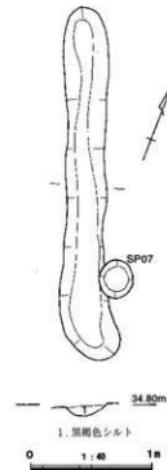


図13 SD08平面図・断面図

溝出土土器 (図17~28、34~36)

28はSD01から、29、30はSD17から、31、32、36はSD04から、34はSD11から、35はSD08からそれぞれ出土した。

28~30は広口壺である。28は口径12.2cmを測る口縁部である。外面にナデを施している。内面は磨滅のため調整は不明である。

29は口径14.4cmを測る。外方へ直線的に立ち上がる口縁部外面に粘土帯を貼り付けて段を形成し、二重口縁状にしている。その上半に櫛描波状文、下半に円形浮文を貼り付ける。円形浮文は残存部において2ヶ所確認している。口縁端部は丸みを帯びるが磨滅が激しく、破面の可能性もある。

30は口径16.7cmを測り、頸部外面には縱方向の、内面には横方向のハケを施す。頸部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は上下に拡張し、4条の櫛描波状文を施す。

31は口径16.9cmを測る壺である。口縁部は外反し端部に面を作る。内外面共に磨滅が激しいため調整はほとんど不明だが、口縁部外面にわずかに縱方向のハケが残る。

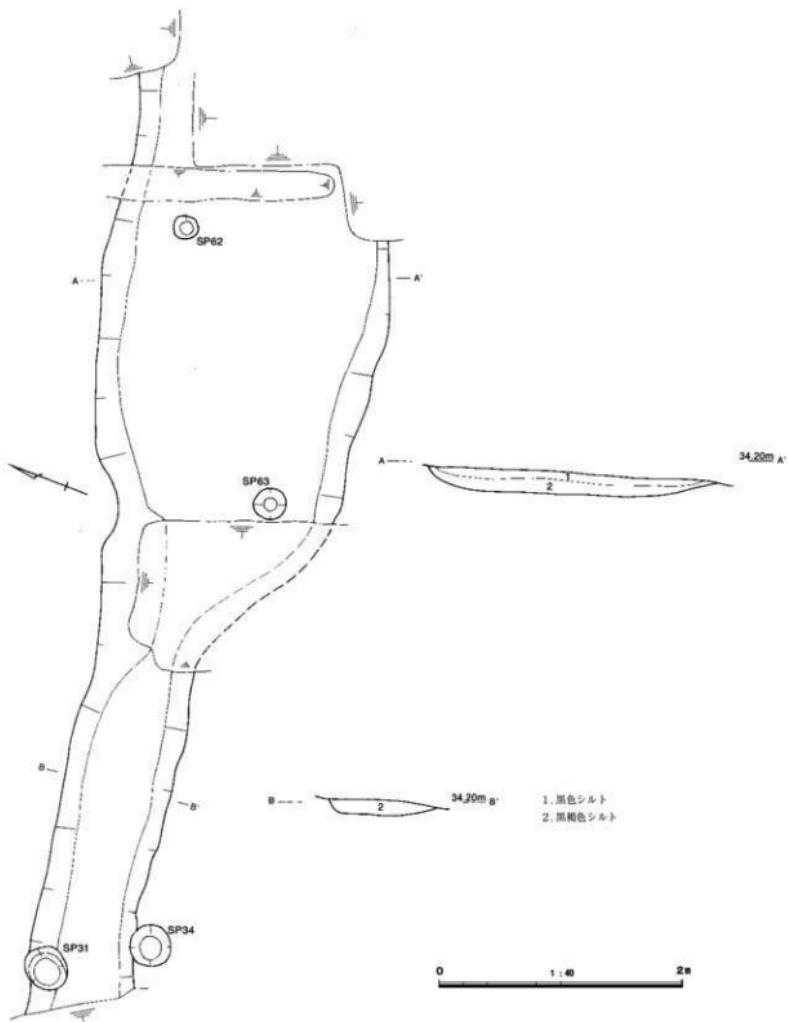


図14 SD11平面図・断面図

32、34は甕もしくは鉢の底部である。32は底径6.3cmを測り、底面に棒状工具による刺突痕が見られる。外面はタタキを、内面はハケを施す。

34は底径4.3cmを測る。外面はタタキを、内面はユビオサエを施す。

35は口径14.0cmを測る小型の鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で屈曲して外反する。内外面共にナデを施す。

36は不明器種である。細片のため全体を復元することは難しいが、口縁部～底部までが出土した。小型品と考えられる。体部は器壁が薄く、直線的に立ち上がり、口縁部は鋭く収める。底部は尖底で直径3～8mmの焼成前穿孔が見られ、残存部では11ヶ所が確認できる。内外面共に磨滅が激しく、調整は不明である。

3. 土坑

調査区全体で、合計17基の土坑を検出した。

SK17(図16)

2区に位置する東西約50cm、深さ約15cmの土坑である。北側は搅乱に切られており、全体の形状は不明である。遺物は甕もしくは鉢の底部や土器の小片などの弥生土器が出土した。

土坑出土土器(図17-33)

33はSK17から出土した甕もしくは鉢の底部である。底径4.9cmを測り、底部は輪台技法で形成する。内外面共に磨滅が激しく、調整は不明である。

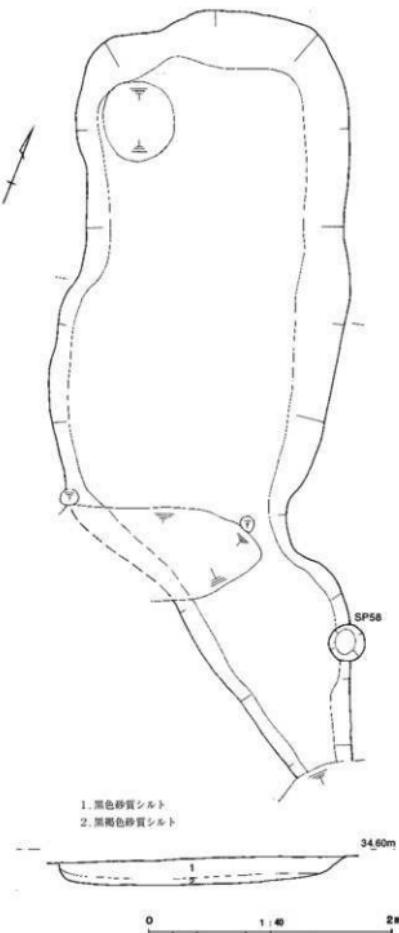


図15 SD17平面図・断面図

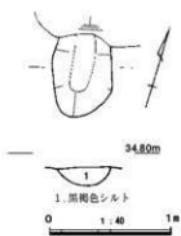


図16 SK17平面図・断面図

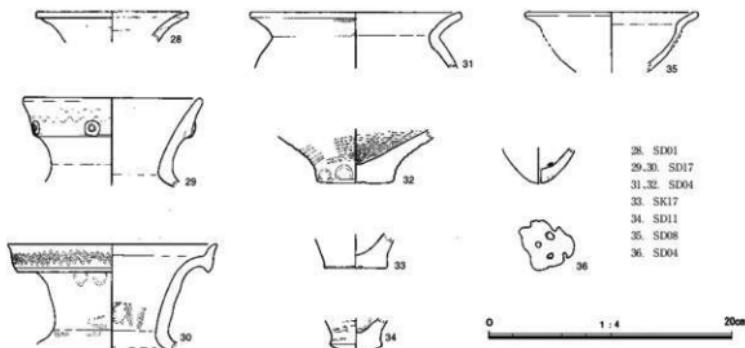


図17 溝・土坑出土土器

4. 落ち込み

調査区全体で計5基の落ち込みを検出した。形状が不定形であることや、他の構造を伴わないことから用途は不明である。

SX01(図18)

2区に位置し、東西長約2.3m、深さ約10~20cmの落ち込みである。北側は調査区外へ延びており、正確な規模は不明である。

遺物は甕もしくは鉢の底部などの弥生土器が出土した。

SX02(図19)

2区北東隅に位置し、南北長約1.7m、深さ約10cmの落ち込みである。東側は調査区外へ延びており、正確な規模は不明である。

遺物は甕もしくは鉢の底部などの弥生土器が出土した。

SX05(図20)

3区南端に位置し、東西長約4.2m、深さ約15~25cmの円形を呈する落ち込みである。南側は調査区外へ延びており、正確な

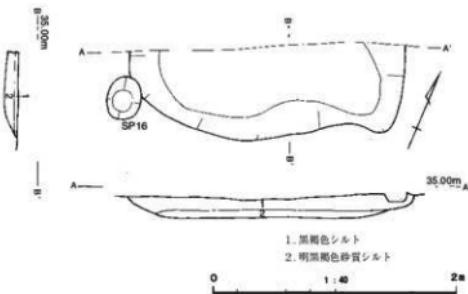


図18 SX01平面図・断面図

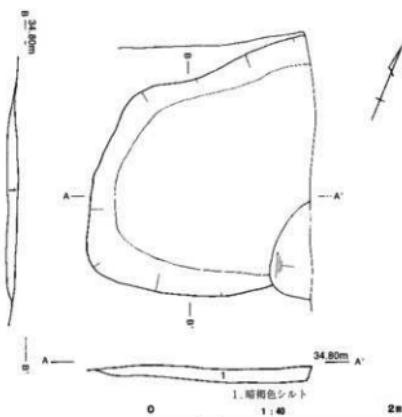


図19 SX02平面図・断面図

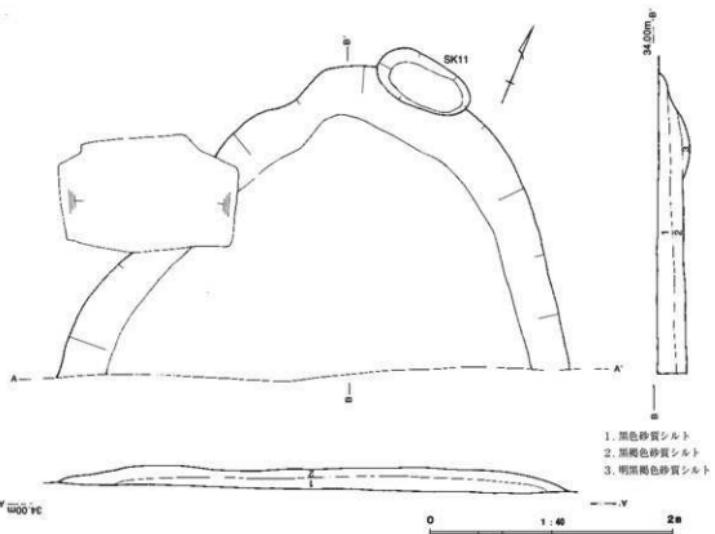


図20 SX05平面図・断面図

規模は不明である。遺物は器台や壺もし
くは鉢などの弥生土器が出土した。

SX07 (図21)

4区に位置し、最大長約42m、深さ約
15~20cmの落ち込みである。西側はSB02
によって切られている。北辺から東辺に
かけて、一部深さ約5cmの溝が掘られて
いる。遺物は高環の脚部などの弥生土器
が出土した。

落ち込み出土土器 (図22)

37はSX05から、38はSX01から、39は
SX02から、40はSX07からそれぞれ出土
した。

37は口径39.4cmを測る器台と考えられ
る口縁部である。外反する口縁端部の下
面に粘土紐を貼り付けて垂下させ、面を
形成する。この面に3条の沈線とその上に円形浮文を貼り付けている。小片のため円形浮文は
1つのみ確認した。内外面共に磨滅が激しいため調整は不明である。

38、39は壺もしくは鉢の底部である。38は底径4.6cm、39は底径3.4cmを測り、共に外面にタ
タキを施すが、内面は磨滅のため調整は不明である。

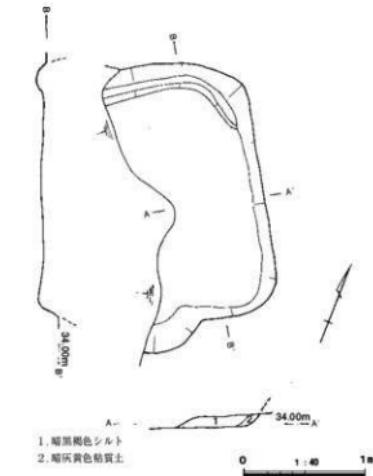


図21 SX07平面図・断面図

40は高環の脚部である。中空で内面には絞り目が見られる。外面では、環部と脚部の境に接合面がみられるため、挿入付加法で形成された可能性がある。

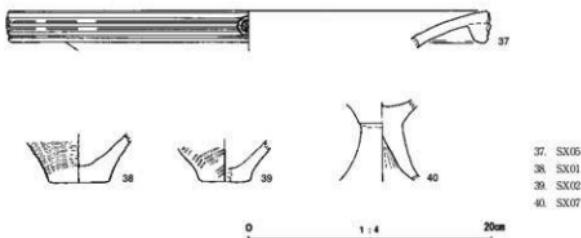


図22 落ち込み出土土器

5. ピット

調査区全体で約80基のピットを検出した。特に調査区東半で多くのピットを検出したが、掘立柱建物を構成するものは確認できなかった。

ピット出土土器 (図23)

41はSP13から、42はSP24から、43はSP23から、44はSP48からそれぞれ出土した。

41は二重口縁壺の口縁部である。口縁端部を欠き、磨滅のため調整も不明である。ただし、図17-29と同様に、口縁部外面に突帯を貼り付けて二重口縁状を呈している。

42は口径13.5cmを測る広口壺である。頸部から口縁部は大きく外反し、口縁端部に面を持つ。内外面共に磨滅が激しいため調整は不明である。

43、44は甕もしくは鉢の底部である。43は底径3.8cm、44は底径4.9cmで、共に外面にはタタキ、内面にはハケを施す。

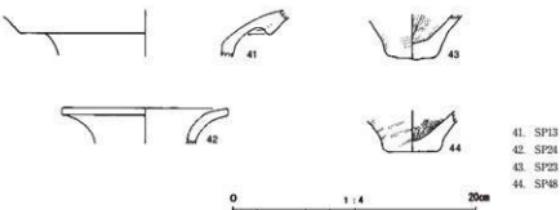


図23 ピット出土土器

6. 遺物包含層他出土遺物 土器 (図24)

45は口径13.3cm、底部径5.6cmを測る広口壺である。体部を一部欠損するが、口縁部～底部が残存している。体部は扁球形を呈し、頸部から強く外反して口縁部を形成する。また、口縁端部はわずかにつまみ上げている。体部には直径4.5cmの焼成後穿孔があり、祭祀に用いられた可

能性がある。外面は磨滅が激しく調整は不明だが、肩部より上位にわずかに縦方向のヘラミガキが確認できる。内面は肩部にユビオサエを、体部上半部に横方向のハケを、底部付近に縦方向のハケを施す。3区南端の遺物包含層などの出土として取り上げたが、落ち込みSX05に伴う土器であった可能性がある。SX05では器台（図22-37）なども出土しており、祭祀関連遺構の可能性も考えられる。

46は壺もしくは鉢の底部である。底径は5.4cmを測り、底部を輪台技法で形成している。体部は底部から直線的に開いている。外面は磨滅が激しく調整は不明だが、わずかに縦方向のヘラミガキを確認できる。内面は縦方向のハケを施し、底部にユビオサエが確認できる。

47は口径28.4cmを測る二重口縁壺である。口縁部は一次口縁から外反して立ち上がり、端部を丸く收める。内面の調整は磨滅のため不明だが、外面には櫛描波状文を施し、その下部にやや被るように円形浮文を貼り付ける。小片のため、円形浮文は1つのみ確認している。

48、49は広口壺である。48は口径14.2cmを測る。やや内傾して立ち上がる頸部と外反する口縁部を持つ。口縁部の直下に突帶を貼り付け、その上に刻み目を施す。また、突帶と口縁端部との間には三角形の刺突列点文を施す。外面はナデを施すが、内面の調整は磨滅が激しく不明である。

49は口径13.4cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部内面に水平な面を作る。内外面共に磨滅が激しく調整は不明である。

50は底径4.3cmを測る有孔鉢の底部である。底部には中央からややはざれて、直径4mmの焼成前穿孔が1ヶ所見られる。外面にはタタキを、内面にはハケを施す。また53は底面に木葉痕があり、木葉の上で製作されたことが分かる。

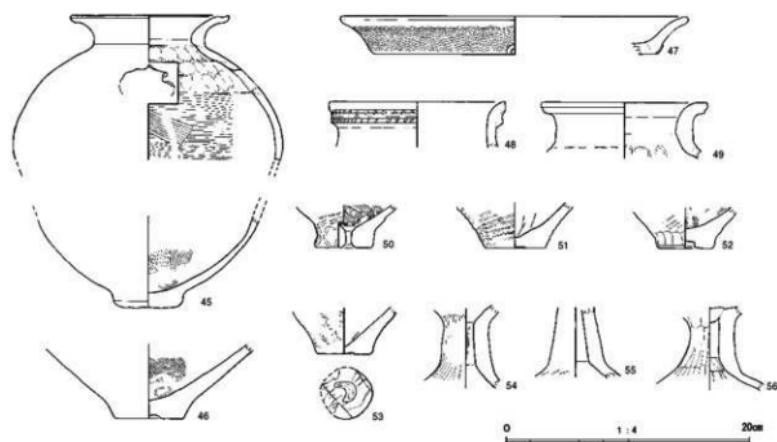


図24 遺物包含層他出土土器

54～56は高壠の脚部である。54と56は外面に縦方向のヘラミガキを施す。55は裾部にわずかに刺突痕あるいは工具痕が見られるが、下方を欠くため詳細は不明である。

石製品（図10-27）

27は長さ4.8cm、幅3.9cm、厚さ3.7cmを測る投弾である。遺物包含層から出土した。自然石を利用しており、加工された痕跡は確認できない。

第4節 第2遺構面（図25）

第1遺構面の調査後、3区南壁と4区西壁の壁面沿いにトレンチを設定し、下層の確認を行った。3区の第1遺構面下層では遺物や遺構は確認できなかった。一方、4区西壁のトレンチでは第1遺構面下層で溝を検出した。これにより、調査区南西部では2面の遺構面が存在することが明らかとなった。しかし、遺物が出土しなかったため遺構面の時期は不明である。

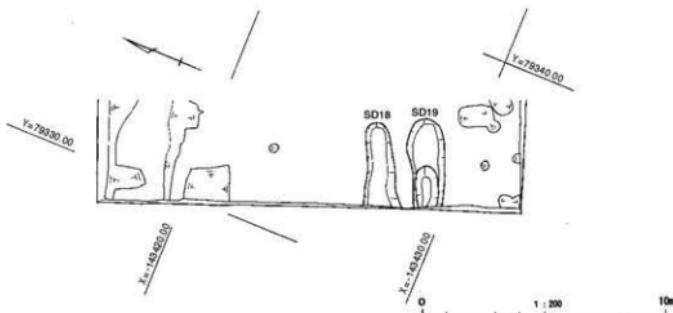


図25 第2遺構面平面図

1. 溝

溝は2条検出している。これらは並行しており、いずれも東西方向に延びる。

SD18（図26）

4区に位置する、幅約1.0～1.5m、深さ約10～20cmの溝である。西側は調査区外へ延びており、正確な規模は不明である。

SD19（図26）

4区に位置する、幅約1.2～1.5m、深さ約10～65cmの溝である。西側はSD18同様に調査区外へ延びており、正確な規模は不明である。

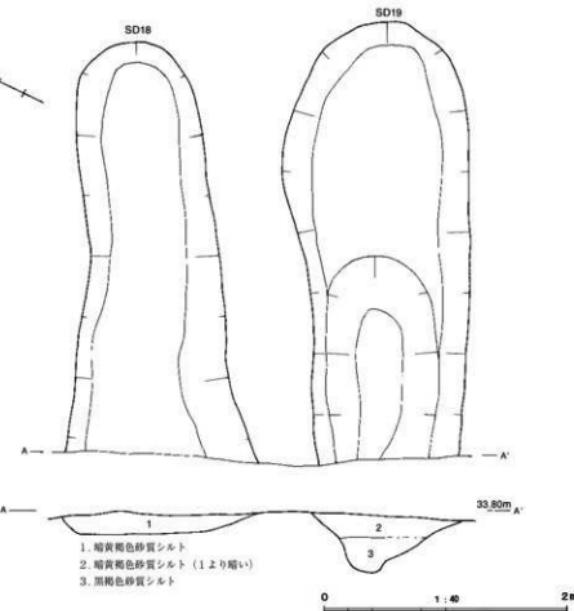


図26 SD18・19平面図・断面図

表2 石製品観察表

半法量の()は残存値

| 掲載番号 | 出土遺構 | 器種 | 法量(単位はcm) | | | 重量(g) | 比重 | 岩石種 | 備考 |
|------|---------------------|----|-----------|------|-----|-------|------|---------------|--------------------------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 23 | SB02-K1 黒灰色砂質シルト | 砥石 | (11.6) | 12.6 | 6.4 | 15822 | 2.33 | 砂岩 | 左側面も摩耗しており、 使用した可能性あり |
| 24 | SB02-K1 黒灰色砂質シルト | 砥石 | (10.8) | 8.0 | 2.3 | 3116 | 2.44 | 砂岩 | |
| 25 | SB02 暗灰色粘性砂質土 | 砥石 | 7.6 | 3.6 | 1.1 | 43.6 | 2.37 | 頁岩か粘板岩 | 床面直上から出土 |
| 26 | SB02 暗灰色粘性砂質土 | 敲石 | 10.6 | 7.0 | 7.0 | 781.9 | 2.55 | 花崗岩 | 床面直上から出土 |
| 27 | 2区遺物包含層 | 投弾 | 4.8 | 3.9 | 3.7 | 99.8 | 2.83 | 花崗閃緑岩か 輝緑岩 | |

表3 土器觀察表

| 試験番号 | 出土構構 | 器種 | 法量(㎤) | | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|------------|------------|------------|--------|--------|--------|--------|--|----------------------------------|
| | | | 口径 | 底厚 | | | | |
| 1 SB02-P1 | 黒灰色粘質細砂 | 弥生土器 広口壺 | (13.2) | — | (14.8) | 明橙褐 | 明橙褐 | やや不良 2~3mmの小礫若干 頭部に刺突3箇 |
| 2 SB02 | 黒褐色シルト | 弥生土器 二重口縁壺 | — | — | (5.2) | 赤褐 | 明褐 | やや不良 1mm前後の砂粒多い |
| 3 SB02-K1 | 黒灰色粘質シルト | 弥生土器 壺 | (13.4) | — | (13.8) | 灰白 | 淡黄褐 | 良好 1mm以下の砂粒若干 2mm前後の小礫多い |
| 4 SB02 | 濃褐色粘質シルト | 弥生土器 壺 | (12.7) | — | (8.2) | 暗赤褐 | 暗灰褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 |
| 5 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺 | 17.2 | — | (9.2) | 暗灰褐 | 淡灰黄 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 |
| 6 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺 | (15.0) | — | (5.8) | 暗黄褐 | 暗黄褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 |
| 7 SB02 | 弥生土器 壺 | (15.8) | 4.5 | 18.2 | 明赤褐 | 明赤褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 | ベッド状遺構上で粘土塊と共に出土 |
| 8 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺 | 15.0 | — | (23.8) | 明橙褐 | 明橙褐 | 良好 2~4mmの小礫若干 1mm以下の砂粒多々 |
| 9 SB02 | 黑色粘質質土 | 弥生土器 壺 | (16.6) | — | (9.8) | 橙 | 橙 | 良好 2mm以下の砂粒多い |
| 10 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺か鉢 | — | 4.0 | (7.5) | 明橙褐 | 淡赤褐 | 良好 1mm以下の砂粒多い |
| 11 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺 | — | 3.0 | (3.1) | 淡褐 | 淡褐 | 良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 |
| 12 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 壺か鉢 | — | 5.0 | (4.8) | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 良好 3mm前後の小礫わずか 1mm以下の砂粒まばら |
| 13 SB02-K1 | 黒褐色粘質シルト | 弥生土器 壺 | — | 4.6 | (8.3) | 明赤褐 | 橙 | 良好 1mm以下の砂粒多い |
| 14 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 底部 | — | (4.6) | (4.9) | 淡褐 | 褐 | 良 1mm前後の砂粒若干 2mm前後の小礫若干 |
| 15 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 底部 | — | 5.6 | (4.4) | 黑灰褐 | 淡黄褐 | 良 1mm前後の砂粒若干 2mm前後の小礫若干 |
| 16 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 底部 | — | 4.9 | (3.3) | 淡赤褐 | 淡橙褐 | 良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 |
| 17 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 底部 | — | 4.0 | (3.8) | 暗黄灰 | 暗灰褐 | 良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 |
| 18 SB02-K1 | 黒色粘質砂質土 | 弥生土器 底部 | — | 3.8 | (3.0) | 明橙褐 | 淡橙褐 | やや不良 1mm以下の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 |
| 19 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 高环 | (19.2) | — | (3.2) | 淡橙褐 | 暗赤褐 | 不良 1mm前後の砂粒多々 |
| 20 SB02 | 暗灰色粘質砂質土 | 弥生土器 高环 | — | — | (8.3) | 淡橙褐 | 淡橙褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫多く |
| 21 SB02 | 明灰色粘質砂質土 | 弥生土器 高环 | — | — | (6.0) | 明橙褐 | 明橙褐 | 不良 1mm以下の砂粒多々 |
| 22 SB02 | 暗褐色シルト | 弥生土器 高环 | — | — | (10.2) | 茶褐 | 明赤褐 | 不良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 |
| SD01 | 弥生土器 広口壺 | (12.2) | — | (2.5) | 茶褐 | 茶褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫多く | |
| SD17 | 弥生土器 広口壺 | (14.4) | — | (7.2) | 明橙褐 | 淡黄褐 | 不良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫多く | |
| SD17 | 弥生土器 広口壺 | 16.7 | — | (8.8) | 淡赤褐 | 黄褐~淡赤褐 | やや不良 1mm以下の砂粒多々 2~4mmの小礫若干 | |
| SD04 | 弥生土器 壺 | (16.9) | — | (14.6) | 橙褐 | 橙褐 | やや不良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SD04 | 弥生土器 底部 | — | 6.3 | (4.4) | 淡茶褐色 | 淡茶褐色 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SK17 | 弥生土器 底部 | — | 4.9 | (2.8) | 暗黄褐 | 全面黒斑 | 良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SD11 | 弥生土器 底部 | — | 4.3 | (12.7) | 黑褐 | 黑褐 | 良好 1mm以下の砂粒若干 7mm以下の砂、砂粒 | |
| SD08 | 弥生土器 鉢 | (14.0) | — | (4.9) | 橙 | 橙 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SD04 | 弥生土器 器種不明 | — | — | (2.9) | 淡橙褐 | 淡橙褐 | 不良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SX05 | 弥生土器 台 | (39.4) | — | (3.2) | 淡黄灰 | 淡黄灰 | 不良 1mm前後の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 | |
| SX01 | 弥生土器 底部 | — | 4.6 | (4.0) | 淡赤褐 | 淡黄褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SX02 | 弥生土器 底部 | — | 3.4 | (3.5) | 暗黄褐 | 暗黄褐 | 不良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SX07 | 弥生土器 高环 | — | — | (6.4) | 暗黄褐 | 明赤褐 | 不良 1mm以下の砂粒多々 | |
| SP13 | 弥生土器 二重口縁壺 | — | — | (3.7) | 明褐 | 明褐 | 不良 1~2mmの小礫多い 1層端部を欠くため1 往不明 | |
| SP24 | 弥生土器 広口壺 | (13.5) | — | (12.9) | 橙褐 | 橙褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| SP23 | 弥生土器 底部 | — | 3.8 | (3.1) | 橙~にぶい橙 | にぶい橙 | 良 1mm以下の小礫、砂粒 | |
| SP48 | 弥生土器 底部 | — | 4.9 | (3.3) | 暗橙褐 | 暗黄褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 3mm前後の小礫若干 | |
| 3区包含層 | 弥生土器 広口壺 | (13.3) | 5.6 | — | 淡赤褐 | 淡赤褐 | やや不良 2mm以下の砂粒多々 底部に穿孔多数 | |
| 2区包含層 | 弥生土器 壺か鉢 | — | 5.4 | (6.1) | 橙赤褐 | 橙赤褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2~2mmの小礫若干 底部を輪台技法で成形 | |
| 47 5区包含層 | 弥生土器 二重口縁壺 | (28.4) | — | (3.1) | 淡黄灰 | 淡黄灰 | 不良 1mm以下の砂粒多々 3mm前後の小礫若干 | |
| 48 2区包含層 | 弥生土器 広口壺 | (14.2) | — | (3.7) | 淡橙褐 | 淡赤褐 | 良 1mm前後の砂粒多々 2mm前後の小礫多い | |
| 49 2区包含層 | 弥生土器 広口壺 | (13.4) | — | (4.6) | 橙褐 | 暗橙褐 | 良好 1mm前後の砂粒若干 2mm前後の小礫多い | |
| 50 6区遺構面精查 | 弥生土器 有孔鉢 | — | 4.3 | (3.5) | 淡橙褐 | 淡黄褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2~5mmの小礫若干 底部を輪台技法で成形 | |
| 51 5区包含層 | 弥生土器 底部 | — | 5.1 | (3.4) | 暗黄褐 | 暗黄褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2~5mmの小礫若干 底部を輪台技法で成形 | |
| 52 3区包含層 | 弥生土器 底部 | — | 4.2 | (3.4) | 淡黄褐 | 暗黄褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫多い 底部を輪台技法で成形 | |
| 53 2区包含層 | 弥生土器 底部 | — | 4.0 | (3.8) | 淡黄褐 | 全面黒斑 | 良 1~2.5mmの砂粒多い 底部に木炭痕あり、底部を輪台技法で成形 | |
| 54 2区包含層 | 弥生土器 高环 | — | — | (6.4) | 淡橙褐 | 橙褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2mm前後の小礫若干 | |
| 55 2区包含層 | 弥生土器 高环 | — | — | (5.6) | 橙褐 | 淡橙褐 | 良好 1mm以下の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 | |
| 56 5区重機削削 | 弥生土器 高环 | — | — | (6.9) | 黄褐 | 黄褐 | 良 1mm以下の砂粒多々 2~3mmの小礫若干 | |

第3章　まとめ

今回の調査では、ほぼ調査区全体に遺構面が残っており、その結果、第1遺構面では竪穴建物、溝、落ち込み、土坑、ピットを検出した。また調査区南西隅では下層で第2遺構面を確認し、溝を検出した。第1遺構面の時期は各遺構から出土した土器より、弥生時代後期後半頃と考えられる。第2遺構面からは遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

遺構の時期と性格

第1遺構面では竪穴建物2棟を検出した。そのうち、竪穴建物SB01について、出土した土器からは時期を推定することができなかつたが、周囲の遺構の状況と比較し、弥生時代後期後半頃の遺構と考えられる。またSB01の周壁溝は建物の北半に巡り、南半では検出されなかつた。調査地自体が北から南へ傾斜する地形であるため、建物外からの浸水を考えると標高の低い建物の南側には周壁溝を設けなかつた可能性がある。

竪穴建物SB02は床面出土土器から、弥生時代後期後半頃の遺構と考えられる。また、埋土から出土した多量の土器もほぼ同時期と考えられるため、竪穴建物SB02は廃絶直後からしばらくの間、土器などを廃棄した捨て場として利用されたと考えられる。4基の主柱穴の内、1基(SB02-P1)から体部下半を欠く広口壺が出土した。この壺は柱穴の上層から出土したため、柱穴をやや埋め戻したのちに土器を埋納したと考えられる。また、他の柱穴からはこうした祭祀の状況は確認できなかつた。

本調査地からは、図22-37など器台の口縁部が何点か出土している。これまでに熊内遺跡では、第2次調査の竪穴建物SA-1埋土、第3次調査の環濠SD01埋土から器台が出土しており、祭祀などに使用したのち廃棄されたと考えられる。したがつて本調査地でも祭祀が行われていた可能性があり、またSX05付近の遺物包含層から出土した広口壺(図24-45)についても、体部に焼成後穿孔が見られることから同様に祭祀に用いられていたと考えられる。

土器について

今回の調査で出土した土器は細片が多く、完形に復元できるものは少なかつた。その中で竪穴建物SB02出土の土器は比較的残りが良く、量も多いためこれらを中心に土器について言及したい。

まず壺は、口縁部が外傾し、端部を丸く收めるものが多い。底部から体部にかけてはタタキで成形するが、口縁部をタタキ出しているものは少ない。体部は、縦方向のハケを施してタタキを消すなどの特徴が挙げられる。壺については、広口壺、二重口縁壺のみで長頸壺などは今回の調査では確認できていない。広口壺については、体部はやや扁球形である。二重口縁壺は通常の二重口縁と、口縁部外面に粘土帯を貼り、二重口縁状にするものの2種類がある。高坏(図9-19)は、口縁部高と体部高がほぼ同じと考えられる。また脚部と坏部の接合は、多くが円盤充填法により行われている。

以上より今回の調査で出土した土器は、森田克行氏の編年(森田1990)では摂津第VI-0~2様式にあたり、弥生時代後期後半頃のものであると考えられる。既往の調査結果を踏まえると、熊内遺跡における弥生時代後期の集落において、終わり頃の様相を示している。

粘土塊について

今回の調査では、堅穴建物SB02の床面から粘土塊が出土した。熊内遺跡では、他に第2次調査で検出した堅穴建物SA-2内から、4点の粘土塊や焼土塊が出土している。SA-2から出土したこれらの粘土塊の大きさはおよそ15~20cm四方である。

また、弥生時代から古墳時代にかけて近畿地方の堅穴建物内床面で出土する粘土塊の大きさはおよそ30~40cm四方が多く、1遺構からは3点以内の出土例が多数を占めていることから、こうした粘土塊が出土する堅穴建物は土器・土製品の製作跡であった可能性が高いとされている（小森・若林2006）。

今回の調査で出土した粘土塊の大きさは1.2×0.1~0.4mと倍以上の大きさであり、上記の例とはやや異なっている。のことから、堅穴建物SB02の粘土塊は、備蓄の状況を示しているとも考えられる。また、SB02で柱抜き取り後の祭祀が行われていることを踏まえると、この粘土塊は共伴する甕と共に堅穴建物内に意図的に置かれた可能性がある。

以上のとおり、本調査では既往の調査成果を追認する結果が得られ、弥生時代後期の環濠集落内における居住域の一端が明らかとなった。

参考文献

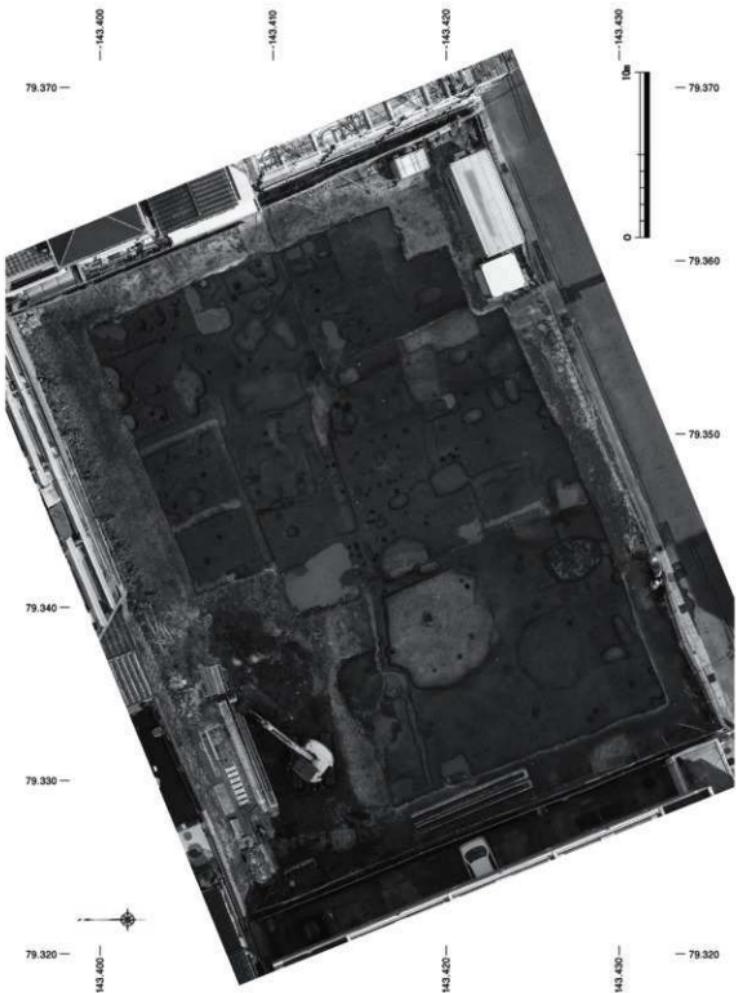
- 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』寺沢薫・森岡秀人編 木耳社1990
黒田恭正「第4章 考察」『森南町遺跡発掘調査報告書－第1・2次調査－』神戸市教育委員会2005
小森牧人・若林邦彦「弥生・古墳時代集落出土の未焼成粘土塊をめぐって－近畿の事例から－」「岩倉忠在地遺跡」同志社大学歴史資料館研究報告第6集 同志社大学歴史資料館2006
大手前大学史学研究所「弥生土器集成と編年－播磨編－」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター・研究報告第5号2007



図27 既往の調査結果 (S=1/2,000)

写 真 図 版

写真図版 1



調査区空中写真(俯瞰モザイク)

写真図版2



1区(調査時1区)全景(南東から)



1区(調査時5区)全景(西から)



2区全景(南西から)



3区(調査時3・4区)全景(南西から)

写真図版4



4区(調査時6区)全景(北東から)



SB01全景(南西から)



SB02全景(東から)



SD18・19全景(北東から)

写真図版6



SB02中央土坑(北東から)



SB02-P1(北東から)



SB02内粘土塊出土状況(北から)



熊内遺跡第8次調査出土土器

写真図版8



SB02出土土器(1)



熊内遺跡第8次調査出土石製品



SB02出土土器(2)



遺構出土土器(除くSB02)

報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|---|-------------|------|-------------------|--------------------|---------------------------|---|
| ふりがな | くもちいせき だい8じちょうさ はっくつちょうさほうこくしょ | | | | | | |
| 書名 | 熊内遺跡 第8次調査 発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | |
| 編著者名 | 櫻井 文佳・田島 靖大 | | | | | | |
| 編集機関 | 神戸市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒650-0044 兵庫県神戸市中央区東川崎町1丁目3-3 神戸ハーバーランドセンタービル ハーバーセンター4階 TEL 078-984-0742 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2020年3月31日 | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 |
| 熊内遺跡 | | 市町村 | 遺跡番号 | 34° 42' 14" | 135° 11' 57" | 20180807 ~ 20181018 | 637m ² (延べ665m ²) |
| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 集落 | 弥生時代 | 竪穴建物、溝、落ち込み | | 弥生土器、石製品 | | | |
| 要約 | 方形竪穴建物2棟をはじめ、溝、落ち込みなどを検出した。出土遺物からいずれも弥生時代後期後半の遺構と考えられ、環濠集落の一部を構成していた遺構と見られる。 | | | | | | |

熊内遺跡

第8次調査 発掘調査報告書

2020.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区東川崎町1丁目3-3
神戸ハーバーランドセンタービル ハーバーセンター4階
TEL 078-984-0742

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1丁目1
TEL 078-371-7000

